

「平和を願う」

西原東中学校 三年 伊良部 理乃

昭和二十年四月一日、私達はこの日を忘れることはないだろう。

この日から始まった。「戦争」という恐しい出来事が。沖縄の青く、透き通った海には海を埋めつくすほどの軍艦。さんさんと輝く太陽があつた大きく広い空には、大量の米軍機。町は、空襲で焼け、周りは死体があちらこちらに。だが、このように残酷な事を始めたのだろう。米軍に見つかっては殺されていく。だが、このように人間同士の殺し合いを認めたのだろう。「戦争」という残酷な出来事さえなければ、犠牲になつた人々は幸せに暮らせていただろう。止めることはできなかったのだろうか。

今の私達は「戦争」と聞いて、残酷だとか悲惨だとか思うだろう。だが、それを生み出したのは人間なのだ。今になって、それに気づいた私達は、はたして変わっているのだろうか。

世界ではいまだに、戦争の恐しさを知らない国がある。その国の現状を伝える人も、多くはないが、いる。命がけてカメラを向け、シャッターを押す。このように、世界で起きている現状を命がけて伝える。難しいことだが、確実に伝わっているだろう。だが、世界の戦争をなくすには、まだ時間がかかるだろう。沖縄でも、米軍の基地問題、オスプレイ、アメリカと沖縄の対立は続いている。この問題も、たかさんの人が基地移設を訴え、たかさんの人がオスプレイ配備中止を訴えた。たかさんの時間、たかさんの力、たかさんの怒り、たかさんの涙、たかさんの言葉、たかさんの想いをアメリカに訴えた。しかし、そんな訴えなど、聞こえないかのように、基地のフェンスは外側を向き、フェンスの外で訴えかけても、米軍は「帰れ」と言うばかり、米軍だけではなく、日本、沖縄の警察までもが訴えかける人を止めようとする。

なぜ、なぜなのだろう。

ある人は言った。

「基地があると、戦争を思い出す。」

時間が進むにつれ、戦争体験者は減っていく。体験者しか知らない残酷さ、悲惨さをどう伝えていくのか。

今、沖縄の空を見ると、オスプレイ、米軍機が飛んでいる。オスプレイは、大きな音を出し、今にも落ちそうなくらい大きく、私達沖縄の上を飛んでい

る。オスプレイが通ると小さい子は、その場にしゃがみこみ、耳に手をあてたまま、じっと止まった。

ある人は言った。

「オスプレイが飛んでいるのを見ると、また戦争が始まりそうで怖い。」

沖縄県民、全ての人がオスプレイ配備に反対している訳ではない。しかし、今の状況を見たら分かるだろう。戦争の事を思い出し、また、あの日の恐怖にさらされている人もいるということ。

食べ物もなく、目の前でたかさんの人が死んでいくのを見ていき、いつ殺されるのか分からず、ひたすら逃げ、自ら自分の子供を殺す人もいれば、自ら自分の手足を切断する人だっている。そんな事、今を生きる自分達にとって、考えられるだろうか。あの時代を生ぬいた人は、思っただろう。

「死にたい。死んで、早く楽になりたい。」

だが、あの時の恐怖をのりこえ、今もずっと戦争の事を子供達に伝えようとしている。未来に伝えようとしている。

命にはタイムリミットがある。いつまでも体験者が戦争について語れるわけではない。ならば、私達が語りつごう。私達は戦争を体験していないから、戦争について、多くは語れないだろう。だからといって、語るのをやめてしまえば、戦争の恐ろしさは、人々の記憶から去り、また、戦争がはじまってしまいかもしれない。「戦争」というのは、人間が起こした大きな大きな過ちである。その過ちを正し、なくしていくのも人間である。

今の沖縄に、戦争はないと思っているのはまちがいだと思う。今、沖縄がかかえている問題で、戦争の恐怖を思い出している人がいるということは、まだ、「戦争」という出来事に終止符はうたれていないということだと私は思う。決して、戦争を忘れる。とは思っていない。

戦争の残酷さ、悲惨さを知ったうえで、もう戦争の恐怖を思い出さないような、平和な世界にしていくことが大切ではないだろうか。

今、私達がやるべきこと。平和のバトンを受けつぎ、今よりも、より平和な世界に近づけるようにすることだと思う。絶対にバトンを止めず、未来へ未来へと私達、人間が犯した過ちを伝え、もう二度とあのような出来事が起こらないことを願い、今をしっかりと生きる。そして、犠牲者の方々のためにも、私達が今、この時を精一杯生きよう。